

『おくの細道』における登場人物「等窮」の表記の問題

—— 小林孔氏説を視野に入れつつ ——

復本 一郎

好いひびきとすぐれたリズムにみちた、巧みに句切り、さまざまに模様を変えて構成された、いろいろ変った句を、なるべくたくさん使うようにしよう。珍奇な言葉の蒐集家であるよりはすぐれた文体家になることにつとめよう。

—— モーパッサン「小説について」

(杉 捷夫訳) より ——

『おくのほそ道』の諸本の中で、今日、未解決の多くの問題を抱えているのは、天理図書館蔵の曾良本と呼ばれてきた『おくのほそ道』であろう。平成六年（一九九四）十一月十四日に八木書店より天理図書館善本叢書の第十卷別冊として刊行された四色カラー版『おくのほそ道』曾良本によって、その全貌を、容易にほぼ正確なかたちで窺うことができる。そこには、本文に朱点、あるいは朱筆による補訂、墨による補訂等が施されているのである。この朱筆、墨による書き入れについては、昭和

六十三年（一九八八）二月二十九日刊の村松友次著『曾良本『おくのほそ道』の研究』（笠間書院）に見える「芭蕉自身が最終的に手を入れたものと考える」とする村松説以来、いくつかの試論が提出されたが、平成八年（一九九六）十一月二十五日に公表された中尾松泉堂蔵の芭蕉自筆本『おくの細道』の認定に櫻井武次郎氏とともにかわった上野洋三氏による『芭蕉自筆「奥の細道」の謎』（二見書房、平成九年七月二十八日刊）において、曾良本における書き入れ・訂正の「すべてが「自筆本」の筆者と同じ筆者の書体であると感得される。（中略）いずれも「自筆本」の筆者、つまりは芭蕉の文字としてまったく矛盾がないと感じられる」との見解が示され、一応、落ち着いたかに思われた。

ところが、ここに、また新たな説が提示された。平成十年（一九九八）四月十日発行の雑誌「文学」（岩波書店）春号の小林孔稿「『奥の細道』の展開―曾良本墨訂前後―」がそれである。小林孔氏によれば、朱、墨二つ

の書き入れの中で、朱の書き入れについては、「改訂にともなう推敲の意図は稀薄であり、おおむね誤字の訂正、仮名遣い、送り仮名、読み、脱字の丁寧な印象を与える補訂である。原著者芭蕉の筆と考えてさしつかえなからう」との、従来の説を踏襲しての見解を示しつつも、墨の書き入れ、訂正については、「大半を素龍の筆蹟と推断して憚らない」というのである。新説である。そのよってきたる最大の理由を字体に求めている結論である。そして、素龍に墨の書き入れ、訂正を依頼したのは、芭蕉であるとす。小林説の結論部に近い部分を左に摘記してみる。

丁寧に臨模された本文（筆者注・芭蕉自筆本『おくの細道』からの曾良本臨模の意）に慎重に校訂がほどこされ、この段階で素龍の清書が始められてもよかつたのである。しかし、事實は素龍の墨書による推敲、添削の筆が加えられる。これは当初から、芭蕉の依頼にもとづいたものであろうから、この加筆をもって清書にとりかかってもよかつたのであるが、最終的にさらに芭蕉の点検の筆が入る。朱訂から数えて、素龍の加添、芭蕉の点検と、三度の手順を踏まえてようやく清書へと移行するのであり、曾良本の紙面には、これだけの豊かな表情が備わっているのである。

この小林説にいちはやく公の場で反応を示したのは、今栄蔵氏である。「連歌俳諧研究」第九十五号（俳文学会、平成十年八月）所収の論考「『奥の細道』の成立をめぐる諸問題」において、「付記」のかたちで「大いに注目すべき論考である」とのコメントを与えている。今氏の論考は、『おくのほそ道』の成立を、元禄六年初秋盆過ぎから初冬の頃まで、とするもの。

小林孔氏は、さらに、平成十年（一九九八）十月十八日、神戸親和女子大学で行われた俳文学会第五回全国大会において、「曾良本の墨訂に関する私見」との題で発表、「曾良本の墨訂（書き入れ・抹消）すべてに素龍の筆か、芭蕉の筆かの判断を示し」、一覧表にして配布した。それによれば、保留部分を除くと、墨の書き入れ中、芭蕉によつて為されたものは、わずかに二例、残りの百六十二例は、素龍によつて為されたもの、ということになる。抹消部は、素龍が一例、芭蕉が百二例という数字が示されている。

小林説によれば、今日まで絶大な影響力を持つて井筒屋版の元禄版本として流布し、披見されてきた『おくのほそ道』の依拠本である素龍本（西村本）『おくのほそ道』の本文は、素龍自身によつて推敲、添削された曾良本によつたものである、ということになるのである。

小林孔氏の説が、芭蕉および素龍の真摯な筆蹟研究に

基づくものであることは、前掲の論考によって明らかであり、それゆえに、墨の書き入れ（補訂）の大部分が、素龍によって為されたとする新説の信憑性は、すこぶる大きいと言えよう（私は、筆蹟鑑定能力に自信がない）。それでは、私も、小林説に全面的に賛意を表し得るのか、と問われれば、そうはいかないのである。その点についての小さな疑点を、まずは、述べてみよう、というのが、小稿の狙いである。

*

まず、素朴な疑問から述べてみよう。曾良本『おくのほそ道』によって任意の一節を左に掲げ、それと墨訂後の本文を併記してみることにする。墨訂の比較的多く見える箇所ということで、「尾花沢」の条の一節を掲出してみる。便宜、漢字は現行の字体に改め、句読点、濁点、ルビ等を付しておく。

A 尾花沢にて清風と云ものを尋ぬ。かれは富るものなれども、心ざしさがいやしからず、都にも折々かよひて、かよひて、旅の情をもしりたれば、日比とどめて、長途のいたはりさまざまともてなし侍る。

a 尾花沢にて清風と云ものを尋ぬ。かれは富るものなれども、心ざしいやしからず、都にも折々かよひて、さすがに旅の情をもしりたれば、日比とどめて、長途のいたはりさまざまにもてなし侍る。（傍点、A

aとも筆者）

小林説を参照にすれば、Aの「さすがに」を、最終段階で抹消したのは芭蕉、aでAの「さすがに」をまず「見せ消」にして、「旅の情をも」の上に「さすがに」を移動させ、書き入れたのは、素龍ということになる。また、Aで「さまざま」との「と」をまず抹消して「さまざま」もてなし侍る」のかたちにしたのは芭蕉、aで「さまざま」にもてなし侍る」のかたちにしたのは、素龍、ということになる。ちなみに、素龍本（西村本）も、一部平仮名表記、漢字表記の違いはあるが、aと同一の本文である。

A aの本文によって、一つ明らかになるのが、「心ざしさすがにいやしからず」（「心ざしいやしからず」と以下の「都にも折々かよひて、旅の情をもしりたれば」（「さすがに旅の情をもしりたれば」との部分との関係である。従来、素龍本の校訂者たちは、一様に「心ざしいやしからず。」で句点を施してきた。が、A aの本文の「さすがに」の位置の移動に注目するならば、むしろ、読点で下に「いやしからず、……旅の情をもしりたれば」と繋がる文脈と判断したほうがよいように思われる。

それはともかく、Aの本文とaの本文を読み比べた場合、どのような印象を受けるであろうか。明らかにaの

本文のほうか、文章全体の流れ、リズムがいいことは、文体に関心のある読者であれば、容易に納得し得るであろう。モーパッサンの言葉を借るならば、「すぐれた文体家にならんとする」作者の強い意志を、そこに見ることができるとはなからうか。

そして、今は、曾良本の墨訂のいちいちについてこの試みをする必要はないが、全体的に墨訂後の本文（小林説に従えば、素龍墨訂後の本文）のほうか、それ以前の新出の芭蕉自筆本を「臨模」した本文よりも、文体を中心に、すぐれているのである。このことは、何を意味するのであろうか。もし、小林説に拠るならば、素龍の文学的才能が、芭蕉の文学的才能をはるかに上回っていた、ということになるのである。墨訂することによってすぐれた本文になっているのであるから、そして小林氏も認められているように、最終チェックは芭蕉自身が行っているから、明らかに改竄ではないのである。しかし、素龍は、はたして、芭蕉が、自らの記した本文の添削を全面的に委ね得るような天賦の文学的才に恵まれていた俳人（あるいは歌学者）だったのであろうか。残念ながら、それを証するに足る資料はないのではなからうか。もちろん、例えば、芭蕉と同時代の俳人鬼貫の紀行文学、元禄三年（一六九〇）成立の「禁足之旅記」（元禄三年刊『犬居士』所収）に登場するなど、当時、

しかるべき評価を受けていた人物であることは確かである。が、例えば、八爪取て心やさしや年ごもりVをはじめとするアンソロジー、元禄七年（一六九四）刊、野坡・孤屋・利牛編『炭俵』（序は素龍、板下も素龍）所収の九句の発句にしても、とても芭蕉と比肩し、凌駕し得る力量があると思われぬ。

ということは、どうということなのであろうか。小林説を肯定し、曾良本の墨訂部分の大部分が、素龍の筆によって為されたものであるとしよう。が、そのことがただちに素龍によって曾良本の本文が推敲されたことを意味しないということなのである。この視点を欠くと、いかにすぐれた筆蹟研究も、たちどころに文学（本文）不在の文学研究という陥穽に落ち込んでしまふ危険性を孕んでいるのである。

『俳文学大辞典』（角川書店、平成七年十月二十七日刊）の「素龍」の項は、上野洋三氏の執筆にかかるが、それによれば、阿波国徳島藩士、大坂住の素龍は、元禄五年（一六九二）冬、芭蕉と対面し、交流がはじまったという。そして、先の今栄蔵説によれば、芭蕉が『おくのほそ道』の本格的執筆をしたのは、元禄六年（一六九三）初秋盆過ぎから初冬の頃までという。この間、芭蕉も、素龍ともに江戸住である。とするならば、芭蕉は、直接素龍に面晤して、曾良本を前に、推敲、補訂の指示

を与えることができたであろう。あるいは訂正箇所のみを手渡して指示することも可能であったであろう。そして、時には、書簡によって推敲・補訂の箇所を伝えることもできたであろう。——その結果としての、曾良本の素龍による墨訂である、と判断したほうが、はるかに自然であると思われるが、いかがであろうか。たとえ、素龍筆による墨訂であったとしても、その墨訂には、大部分、芭蕉の推敲の意志が働いていたと見るのである。

芭蕉は、文体、リズムということに執拗にこだわった俳人であった。自筆本『おくの細道』のおびたらしい墨訂も、文体、リズムにかかわっての箇所であることが、少なくない。小稿冒頭に掲げたモーパッサンの言葉が、改めて想起されるのである。が、以上に私が述べてきたことは、あくまでも推測である。たとえ多くの読者の賛意を得たとしても、推測は推測であり、弱さを否めない。そこで、右に述べてきたことを、『おくのほそ道』中の小さな、小さな事例によって証明してみようというわけである。

*

芭蕉自筆本『おくの細道』は、平成八年（一九九六）十一月、架蔵者の中尾松泉堂書店より『芭蕉自筆本奥の細道複製』として出版された。が、残念ながら、七十数箇所に及ぶ貼り紙訂正前の箇所は、複製されていない。

それは、自筆本の調査・鑑定の任に当った櫻井武次郎、上野洋三両氏によって、同複製に別冊として付されている『芭蕉自筆本奥の細道 翻訳・解説』において、活字で示されている。それを参照しながら、以下の論を進めることにしたい。ここでも、漢字は現行の字体に改め、句読点、濁点、ルビ等を、私に付することにした。私が注目したのは、自筆本『おくの細道』の左の一節である。貼り紙訂正前の本文と、貼り紙訂正後の本文を併記する。

B須か川の駅に等窮いふものをたづねて四、五日とゞめらる。先、白河の関まぎいかにこえつるにやと問。長途の勞、身み心つかれ且は風景に魂たまうばくれ懐旧に腸を断て、はかんしうおもひめぐらさず。

風流の初やおくの田植うた
無下に越がたき名所のさすがに、と語れば、脇、第三を、つゞけて終に一巻となしぬ。（中略）等躬が宅を出て五里計、檜皮の宿を離れてあさか山有。

b須か川の駅に等躬うらというものをたづねて四、五日とゞめらる。先、白河の関まぎいかにこえつるにやと問。長途のくるしみ、身み心つかれ且は風景に魂たまうばくれ懐旧に腸を断て、はかんしうおもひめぐらさず。

風流の初やおくの田植うた
無下にこえむもさすがに、と語れば、脇、第三と、

つゞけて一卷となしぬ。(中略)等躬が宅を出て五里計、檜皮の宿を離れてあさか山有。(Bbとも傍点筆者)

続けて、曾良本の同箇所の本文、および墨訂後の本文を併記してみる。校訂は、前に準ずる。

C 須か川の駅に等躬というものをたづねて四五日とゞめらる。先、白河の関いかにこえつるにやと問。長途のくるしみ、身一心つかれ且は風景に魂うばくれ懐旧に腸を断て、はかしくしうおもひめぐらさず。

風流の初やおくの田植うた

無下にこえもむさすがに、と語れば、脇、第三とつゞけて一卷となしぬ。(中略)等躬が宅を出て五里計、檜皮の宿を離れてあさか山有。

c 須か川の駅に等躬というものをたづねて四五日とゞめらる。先、白河の関いかにこえつるにやと問。長途のくるしみ、身一心つかれ且は風景に魂うばくれ懐旧に腸を断て、はかしくしうおもひめぐらさず。

風流の初やおくの田植うた

無下にこえむさすがに、と語れば、脇、第三とつゞけて三巻となしぬ。(中略)等躬が宅を出て五里計、檜皮の宿を離れてあさか山有。(Ccとも傍点筆者)

BbCcの四つの本文を比較すると、bCの本文は一致するが(すなわち、貼り紙訂正後の本文と、曾良本の

墨訂前の本文)、他は、相互に何箇所か異同がある。ただし、私が、今、注目しようとしているのは、他はすべて省略にゆだねて、登場人物「等躬」「等窮」の表記の異動である。この一点のみに絞って、小林説に疑義を呈しておきたい。

検討に先だって、「等躬」「等窮」について少し見ておくことにしたい。荻野清著『芭蕉論考』(養徳社、昭和二十四年四月十五日刊)に収められている「須賀川の等躬」に詳しい。寛永十五年(一六三八)に生まれて、正徳五年(一七一五)十一月十九日に没している。享年七十八。未得門、のち調和系俳人と密なる交流を持っている。陸奥国磐瀬郡須賀川村(福島県須賀川市)住の俳人であるが、江戸に住したこともあり、芭蕉とは、旧知の間柄。芭蕉より六歳年長。延宝七年(一六七九)刊、調和編『富士石』に、

桃青万句に

三吉野や世上の花を目八分

等躬

の前書を付した句が見え、芭蕉(桃青)と等躬の関係を窺うことができる。

正しくは「等躬」であり、『おくのほそ道』以外の「等窮」の表記は、素龍本(西村本)『おくのほそ道』を底本とする元禄十二年(一六九九・支考『俳諧古今抄』説)、または元禄十五年(一七〇二・阿誰軒『俳諧書籍

『目録』説)刊の井筒屋庄兵衛版の板本『おくのほそ道』の流布の影響下による表記であると思われる。そのことについては、村松友次著『芭蕉の作品と伝記の研究』(笠間書院、昭和五十二年五月三十日刊)所収の「『おくのほそ道』登場人物の虚名」の項の「等窮」に明らかにされている。ちなみに、村松氏によれば、『おくのほそ道』以外で「等窮」と表記しているのは、寛延四年(一七五二)跋の晉流遺稿『蕉門録』と、天明七年(一七八七)成立の後素堂著『おくのほそ道解』である由。なお、「ビブリア」№96(天理図書館、平成三年五月)所収の牛見正和稿「『俳諧葱摺』」には、柿衛文庫蔵の等躬の句へ火燧芭朝貞の光成にけりVの自筆短冊が写真版で掲出されているが、その署名も「等躬」の表記である。

*

そこでいよいよ「等躬」「等窮」の二つの表記の問題である。

まず、もう一度、貼り紙訂正後の自筆本bの本文に注目していただきたい。中尾松泉堂書店の複製本によって我々が見ることのできる本文である。平成九年(一九九七)一月二十四日に岩波書店より上野洋三・櫻井武次郎編『芭蕉自筆 奥の細道』の影印本も出版されているので、それによっても確認し得る。bに見えるごとく、須

賀川の俳人「等躬」の名前は、前後二箇所に記載されている。前の箇所は、「等躬」とあり「躬」の字には、ルビが付されている。後の箇所には「等躬」と、そのまま記されている。この貼り紙訂正後の『おくの細道』の本文を正確を期して筆写したのが、天理図書館蔵の朱訂、墨訂前の曾良本の本文、すなわちCである(私は、この両者の間に、もう一本芭蕉自筆本の存在を想定するが、今は省略する)。bとCを比較いただければ、漢字、平仮名等の文字遣いを含めて、正確に筆写されている様を見ることができよう。

次にcに注目していただきたい。Cの「一卷」が「三巻」に墨訂されているが(そして、その訂正の意味は、当然、追究されるべきであるが)、小稿では問わないうことにする。あくまでも「等躬」の表記に焦点を絞ることにしたい。すると、Cの二箇所の「等躬」の「躬」の字が「見せ消」によって「窮」と墨訂されていることに気が付くであろう。

そして、ここからが肝腎なところなのであるが、小林説によれば、この「見せ消」墨訂は、素龍によって為されたものである、ということになるのである。先にも記したように、私は、筆蹟鑑定力に疎い。そこで、小林説の素龍筆蹟の比較検討による実証的研究の成果を受け入れて、曾良本『おくのほそ道』の墨訂者を、芭蕉ではな

くして、素龍である、とする説に従うことにしよう。ただ、そのことが、「等躬」を「等窮」と訂正したのも、素龍の文学的意図によるもの、とは簡単にならないのではなからうか。素龍は、実在の人物である「等躬」を、なにゆえ、わざわざ「等窮」と表記する必要があるたのであろうか。大いなる疑点であらう。

そこで大きくクローズアップされてくるのか貼り紙訂正前の芭蕉自筆の『おくの細道』の本文、すなわちBなのである。そこにおいては、二箇所ある「等躬」表記の中で、前の表記は、最初「等窮」と書かれていたことが、櫻井武次郎・上野洋三両氏の「DVE」（デジタル・ビデオ・エフェクト）による調査で明らかにされているのである。後の表記は「等躬」である。

この事実から何がわかるであらうか。まず「等躬」を「等窮」と表記する、その表記方法のアイディア（発想）は、紛れもなく芭蕉に出るものだったということである。曾良本の墨訂が、小林説のごとく、素龍によって為されたものであったとしても、その指示は、先にも記しておいたように、直接、面晤によって、口頭で与えられたか、メモを手渡されたか、書簡によってか、とにかく芭蕉自らによって為されたものであるということなのである。素龍の意志によっての訂正ではなく、あくまでも芭蕉の意志によっての訂正である。このことは、「等躬」

「等窮」の表記に限らずに、小林説が素龍の墨訂とする大概について言えるように思われる。例えば、これも『おくのほそ道』中に見える四箇所「俳諧」「誹諧」表記の問題についてもそうである。小林説によれば、「俳諧」から「誹諧」への墨訂も、素龍によって為されたということである。が、当然、これも、芭蕉の意志によっての訂正、と見るべきであらう。清輔の『奥儀抄』や順徳院の『八雲御抄』以来、諸書でしばしば問題にされてきた「俳諧」「誹諧」の表記に、俳人である芭蕉が無関心、無神経であるはずがないのである。芭蕉に対する「歌学なし」との批判が謂れないものであることについては、すでに、拙稿「葦は山によまず」の真意―『去来抄』の一考察―（『麒麟』第六号、平成九年二月）、拙著『芭蕉歳時記―堅題季語はかく味わうべし―』（講談社選書メチエ、平成九年十一月刊）に述べた。また、「俳諧」「誹諧」両表記の問題に関しては、拙稿「おくのほそ道」における表記「誹諧」に関する一考察（『麒麟』第三号、平成六年三月）、八新出芭蕉自筆本『おくの細道』一次草稿本説―「俳諧」「誹諧」用字・用語考―（川本皓嗣他編『芭蕉解体新書』雄山閣出版、平成九年四月刊）に述べた。参照されたい。

話を「等躬」「等窮」表記の問題に戻す。Bに注目しただきたい。芭蕉は、当初、ある意図のもとに「等窮」

と記したのであった(どのような意図であったかは、後述する)。ところが、「等躬」は、芭蕉にとつて旧知の、実在の人物であり、そのことがひっかかって、迷いに迷つて、実在の人物そのままの併号表記「等躬」へと、結局は、貼り紙をして、訂正してしまつたのである。次の、二番目の「等躬」表記は、もはや、前の「等躬」「等躬」表記で迷つた末の「等躬」への決定であつたので、すんなりと「等躬」と記したということであろうと思われる。私は、先にもチラッと記しておいたように、この新出の貼り紙訂正おびたしい芭蕉自筆本『おくの細道』を、もう一度、芭蕉が微訂正を施して清書した、第二次草稿本とも呼ぶべきものの存在を想定するのであるが、そして、曾良本は、第二次草稿本からの写しと考えるのであるが、今は、先に示した拙稿へ新出芭蕉自筆本『おくの細道』一次草稿本説に委ねて、小稿では、bを筆写したものが、Cとしておく。この箇所は、それで支障はない。

そこで、曾良本『おくのほそ道』の筆者者は、bの通りに本文を筆写したわけである。二箇所「等躬」は、もちろん、二箇所とも「等躬」である。——ところが、芭蕉は、やはり、「等躬」「等躬」の表記がずっと気になつていたのである。芭蕉の手もとにも、当然、いくつかの『おくのほそ道』の草稿があつたであろう。曾良本の筆写者から返却された、私の説で言えば第二次草稿本『おくのほそ道』があつたであろうし、新出の第一次草稿本『おくの細道』もあつたと思われる。それらに、時々目を通しながら、文学作品としての完璧を期して、細部に至るまで、チェックしていったのであろう。そして、その度に、素龍に、訂正箇所を指示したのであろう。「等躬」の表記もそうである。芭蕉なりの意図をもって最初に書いた「等躬」の表記、しかし、一度は決心して葬り去つた「等躬」の表記に、やはりこだわつたのである。そして、「等躬」ではなく「等躬」としようとの一大決心を、改めてしたのである。芭蕉は、そのことを素龍に指示した。直接口頭で指示したか、メモか、書簡か、それは、今日では明らかにし得ない。が、とにかく、指示したのである。

そして、その指示を受けた素龍は、二箇所の「等躬」表記を、二箇所とも「見せ消」にして「等躬」と墨訂したのであつた。曾良本『おくのほそ道』における素龍の墨訂箇所には、このようなきざつによる訂正が少なくないと思われる。そのことが明らかとなる「等躬」「等躬」の二表記である。

*

それでは、芭蕉は、一転、二転しながら、最終的には、なぜ実在人物「等躬」を、「等躬」と表記したのであ

うか。そのことを簡単に述べておきたい。

一番新しい『おくの細道』の注釈書は、小学館新編日本古典文学全集『松尾芭蕉集②』に収められている井本農一・久富哲雄校注・訳『おくのほそ道』である。そこにおいては、「等窮」の表記に「私小説的手法による表記」との注が付されている。大筋では、この注でいいと思われるが、なお、私見を述べておくことにする。

私は、芭蕉の『おくのほそ道』を、不特定多数の読者を念頭において執筆された私のいわゆるハ晴∨の作品であると考える。そのことについては、すでに拙著『笑いと謎―俳諧から俳句へ―』（角川選書、昭和五十九年六月刊）で述べた。不特定多数の読者にとつては、知る人ぞ知る、といった存在の俳人であった「等躬」が、「等躬」と表記されているようが、「等窮」と表記されているようが、実は、大した問題ではないのである。芭蕉が、『おくのほそ道』の旅の途次に立ち寄ってから以降、『葱摺』（元禄二年刊）、『伊達衣』（元禄十二年刊）、『一の木戸』（宝永二年刊）と俳書を立て続けに出版しているが、それでもやはり、知る人ぞ知る、いった俳人であったのである。それゆえに、芭蕉も「等窮（躬）」といふものをたづねてのごとき表現を採っているのである。他にも「拳白と云もの」「画工加衛門と云もの」「清風と云者」「図司左吉と云者」「長山氏重行と云物」

「何処と云者」「一笑と云もの」「北枝といふもの」「天屋何某と云もの」といった具合である。これらの人々は、当時、芭蕉が『おくのほそ道』の読者として想定した不特定多数の人々の間では、知名度が低いと判断したためであろう。「といふもの」との表現を採ることによって、読者は、何の抵抗もなく、先へ先へと読み進むことができるのである。対して、「空海大師」「妙禅師」「法雲法師」「清輔」「行基菩薩」「佐藤庄司」「義経」「弁慶」「藤中将実方」「能因法師」「雲居禅師」「秀衡」「泰衡」「慈覚大師」「干将」「莫耶」「行尊僧正」「西行法師」「神功后宮」「実盛」「義朝公」「木曾義仲」「樋口の次郎」「道元禅師」「仲哀天皇」といった歴史上のよく知られている人物に対しては、「といふもの」との表現方法を採らずに、ストレートな表現で、そのまま記している。ハ晴∨の作品としての『おくのほそ道』への配慮が、こんなところにも窮知し得るのである。が、『おくのほそ道』には、ハ藝∨の部分を知悉している、特定少数の読者もいる。芭蕉の門弟たちであり、『おくのほそ道』に登場する「等躬」も含めての、先に掲出した人々、および、その周辺の人々である。彼等は、特に『おくのほそ道』に登場する人物、およびその周辺の人々は、特定少数のハ藝∨の読者として、不特定多数のハ晴∨の読者とは違った関心を持って、『おくのほそ

道』を興味深く読んだであろう（あるいは、読むであろうことが、作者である芭蕉には、十分に想定し得たであろう）。自らみづかが、あるいは、自分たちがよく知っている某々が、どのように形象化されているであろうか、といった関心である。

そして、その一人が、小稿で問題とした「等躬」なのである。「等躬」にとつては、『おくのほそ道』は、モデル小説だったのである。その意味では、「清風」にとつても、「何処」にとつても（「一笑」は物故者ゆえ、性格を少しく異にするが）同様である。それなのに、芭蕉は、なぜ、「等躬」のみ「等躬」と表記して、實在の人物であるような、ないような表現をしたのであろうか。詳しくは、拙稿「田植うた」考―能因への挨拶という視点から―（静岡大学人文文学科「人文論集」No.33、昭和五十八年一月）に委ねて省略に従いたいだが、「風流の初やおくの田植うた」の芭蕉にかかわつての「等躬」がらみの一節、事実と大幅に違うのである。そもそも、『おくのほそ道』そのものが文学作品であるので、事実と違うことは一向にかまわないのであるが、實在の人物が登場するモデル小説的部分では、プライバシーの侵害にもなりかねないので、芭蕉としても神経をつかつたのであろう。「等躬」が『おくのほそ道』を披見した場合（芭蕉が、ここまで細かい配慮をしていることも、芭

蕉が『おくのほそ道』を八晴はつはの作品として公刊せんと
の意志を有していたことへの一証左とならう）、そこでは、自分が発言したこともないような言葉が自分の言とされていたり、自分の眼前で自分のために芭蕉が作つてくれた句が、白河の関での作とされていたりするのであるから、戸惑とまどいを禁じ得ないであろう。また、「等躬」の周辺の人々も、自分たちが見たり、聞いたりしたことは、まったく別のことが書かれていたならば、何となく釈然しやくぜんとしない気分になるであろう。――そんな八藝はつげの部分を知っている「等躬」を中心とする特定少数の読者への配慮が芭蕉に働いて、「等躬」を、逡巡の末、最終的には「等躬」と表記せしめたのであろう。「須賀川」の一条があくまでも、虚構ウソコトであることを明らかにしたのである。「白河の関」がらみの「須賀川」の条は、『おくのほそ道』前半部のクライマックスともいふべき大切な一条だったということである。

*

文学は、故人の才能にかかわる部分がすこぶる大きい。――このことを認めるか、認めないかは、研究者の文学に対する根本的な姿勢を問うことになる。曾良本『おくのほそ道』における素龍の墨訂の大部分は、芭蕉の指示によって為なされたと判断するのが妥当であろう。

（平成十一年一月十日成稿）